

<翻 訳>

叙事詩の宗教哲学 —Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXVI) ¹—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード： ナーラーヤナ，バラモンの卓越性，ナーラーヤナの異名

[329 章] (B.342 章 (vv.1-65), C.13188-13223, K.351 章) (ナーラーヤナ章 (9) バラモンの偉大さを示すエピソード)

アルジュナは言った。

- (1) どうしてアグニとソーマはかつて一つの源をもつ者として生じたのですか²。私にこのような疑問が生じました。それを断ち切って下さい、マドゥの殺害者よ。

聖なる至尊者は言った。

- (2) おお、余は余自身の威力より生じた故事を汝に語るであろう³，パーンドゥの息子よ。心を一つにして余の言うことを聞くがよい、プリターの子よ。
- (3) (散文) [1] 第四の千ユガが過ぎ去った⁴帰滅の時⁵，[2] あらゆる生き物が滅し，動くもの・動かぬものが見えない時⁶，[3] 火・地・風のない⁷暗闇において，世界が一つの海の水であった時⁷，[4] 暗闇というものが，征服され(?)，名前なく⁸，第二のものなく，存在していた。[5] 夜でもなく，昼でもなく，有でもなく，無でもなく，顕現でもなく，未顕現でもない状態において。

[6] この状態の時⁹，ナーラーヤナの特長 (guṇa) に依存する，不滅の，不老の¹⁰，感官なき，捕捉で

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXV)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 12 号) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1899]: E.W. Hopkins, "Lexicographical Notes from the Mahābhārata," JAOS 20, 1899, pp.18-30.
- Gonda [1970]: J.Gonda, Viṣṇuism and Śivaism, A Comparison, London, 1970.
- Hara[1987]: Minoru Hara, "Invigoration", Hinduism und Buddhismus, Festschrift für Ulrich Schneider, Freiburg, 1987, pp.134-151.

²P.,B.: ekayonī pravartitau K. ekayonī prakīrtitau Cv. eka eva yoniḥ kāraṇaṃ yayos tau / ata eva ubhau militvā ekasya yajñakarmanāḥ yonī mukhabhūtau / (両者の yoniḥ, すなわち, 原因は, 一つである。従って, 両者は結合して, 一つの祭式行為の二つの原因, すなわち, 二つの口となったのである)

³hanta te vartayisyāmi purāṇaṃ Cf.Hopkins[Great Epic]: in epic, no essential difference between atīta, ākhyāna, purāṇa and itihāsa, p.50.25.

⁴P. caturthe yugasahasrānte B.,K. caturyugasahasrānte Cf.Hopkins[1903]: the period of creation lasts till the end of a thousand caturyugas, p.43.31.

⁵saṃprakṣālanakāle Ca.,p.: saṃprakṣālanakāle, ekārṇavakāle / (saṃprakṣālanakāle とは, 唯一の水である時に, という意味である) Cn. pralayakāle / (帰滅の時に, という意味である)

⁶avyakte Cs. avyakte, darśanahīne sthāvarajaṅgame, sthāvarajaṅgamarahite / (avyakte とは, 動くもの・動かぬものが見えない時, すなわち, 動くもの・動かぬものがない時, という意味である)

⁷jalaikārṇave loke Cn. jalaikārṇave loke, salilavac cidekasamudre, ekārṇavadvitiye ity arthaḥ / (jalaikārṇave loke とは, 水のように, 心が一つの海である時, すなわち, 一つの海のごとく第二のものがない時, という意味である)

⁸P. tama ity evābhībhūte 'saṃjñake B. āpa ity evaṃ brahmabhūtasamjñake K. mamāyam ity aviditabhūtasamjñake

⁹P.,K.: etasyām avasthāyām B. evam asyām vyavasthāyām Ca. etasyām avasthāyām, pralayadaśāyām atītaprāyāyām / (etasyām avasthāyām とは, 十回の帰滅が過ぎ去った時に, という意味である)

¹⁰P. ajarād B.,K.: ajarāmarād

きない、不生の、真実の、不殺生の、美しい、さまざまな個別の活動をする¹¹、[7] 不滅の¹²、不老不死の、形態なき、一切に遍満し、一切の作者である、永遠の暗闇から¹³、プルシャが、すなわち、不動のハリが¹⁴生じた。

- (4) (散文) [1] この点について、次のような証言がある¹⁵。(Cf. Rg-Veda X.129.1-3: Hopkins[Great Epic]: Vedic Citation in the Epic, 24.22.) [2] 昼もなかった。夜もなかった。[3] 有もなかった。無もなかった。[4] かつては一切の形象は暗闇だけであった。[5] その意味は、それ(暗闇)は一切の母である¹⁶、というように解釈される。
- (5) (散文) [1] その時、その暗闇から生じたプルシャは¹⁷、すなわちブラフマー神の蓮を母胎とする者は、生じると、存在物を創造しようとして、両目からアグニとソーマを¹⁸創造した。[2] それから存在物の創造が始まると、生き物の順序によって¹⁹、バラモンとクシャトリヤが生まれた。[3] ソーマとはブラフマー神であり、ブラフマー神は、バラモンたちである。[4] アグニはクシャトリヤであり、バラモンはクシャトリヤよりも力が強い。[5] なぜと言うならば、世間での明らかな性質がそのようであるから。[6] バラモンより上位の存在はかつて生じたことはない。[7] 「燃えている火に(バラモンは)供物を供える」と考えて²⁰、私は述べている。[8] ブラフマー神による存在物の創造が終ると、ブラフマー神は、存在物たちを安立して、三界を維持するのである。
- (6) (散文) [1] マントラの次のような言葉もある。[2] アグニよ、汝はあらゆる祭式のホートリ祭官として、[3] 人間という生き物の中で、神々によって、任命されたのである²¹。(Cf. Rg-Veda VI.16.1) [4] この点について次のような証言がある。[5] アグニよ、汝はあらゆる祭式のホートリ祭官として、[6] 神々によって、世界の間人たちによって、任命されたのである²²、という(証言がある)。[7] アグニは、もろもろの祭式のホートリ祭官であり、執行者である。[8] ここでのアグニはバラモン (brahma) である。
- (7) (散文) [1] マントラがなければ献供 (havana) はない。[2] 人がいなければ苦行はない。[3] もろもろの供物とマントラの尊崇は、神々と人々にとって²³存在している。このために、「(アグニよ、) 汝は

¹¹P.,B.: lalāmād vividhapravṛttiviśeṣāt K. lavādibhir advitīyād apravṛttiviśeṣād

¹²P. akṣayād B.,K.: avairād akṣayād

¹³P. śāśvatāt tamasah B. śāśvatas tamasah K. śāśvatāt tamasah parāt

¹⁴hariḥ Cs. hariḥ, avidyākāryasamhartā / (hariḥとは、無知の行為を奪う者が、という意味である) Cf. Matsubara[1994]: Hari, the first person born from the formless God, p.81.1.

¹⁵nidarśanam api hy atra bhavati Cn. nidarśanam, śrutirūpapramāṇam / (nidarśanam とは、天啓聖典の形をとった基準が、という意味である) Cs. mantrān nitarāṃ darśayatīti nidarśanam / (もろもろのマントラを明白に示すことから、nidarśanam と言われる)

¹⁶P. sā viśvasya jananī B.,K.: sā viśvarūpasya rajanī Cv. sā, tamorāśiḥ, puruṣanāmako hariḥ / (sā とは、暗闇の塊であり、プルシャという名のハリである)

¹⁷tamaḥsambhavasya puruṣasya Cf. Matsubara[1994]: Hari, the first person born from the formless God, p.81.1.

¹⁸agniṣomau Cn. pratāpahetur evāgnir ugrasvabhāvaḥ, śāntasvabhāvaś cāpyāyaka eva somah / (恐ろしい自性をもつアグニ、苦しみの原因であり、ソーマは寂靜を本性として、満足させるものである)

¹⁹P. tato bhūtasarge pravṛtte prajākramavaśād B. tato bhūtasargeṣu sṛṣṭeṣu prajākramavaśād K. tato bhūtasargeṣu sṛṣṭeṣu prajākramavaśād

²⁰P. dīpyamāne ḡnau juhotīti kṛtvā B.,K.: dīpyamāne ḡnau juhoti yo brāhmaṇamukhe juhotīti kṛtvā

²¹P. hito devebhir mānuṣe jane iti B.,K.: hito devānām mānuṣāṇām ca jagata iti Deussen は、Rg-Veda VI.16.1 の参照を指示している。(p.801, No.10) Cf. Ganguli: O Agni, art the Hotri in sacrifices, and benefactor of the deities, p.155.36. Esnouf[1979] もこれに従っている。(p.147, Nos.10, 11)

²²P. hito B.,K.: tvaṃ hito Cf. Hopkins[Great Epic]: Vedic Citations in the Epic, Rīg Veda, i,13.4, p.24.25.

²³P. devamanuṣyāṇām B.,K.: devamanuṣṛṣṇām

叙事詩の宗教哲学

ホートリ祭官として任命されている』(というマントラがある)。[4] 人々はホートリ祭官としての職務をもっている。[5] パラモンには²⁴祭式を行うことが規定されている。クシャトリヤとヴァイシャという再生族にはない。[6] そのため、パラモンたちは、アグニとなって、もろもろの祭式を導くのである。[7] もろもろの祭式は神々を満足させ、神々は大地に生気を与えるのである (bhāvayati)。

- (8) (散文) [1] シャタパタには、(次の)一節がある²⁵。[2] パラモンの口に布施と供物を献ずる知識ある者は²⁶、灯されたアグニに献供するのである。[3] このように知識あるパラモンたちは、アグニとなって、火を絶やさぬようにするのである (bhāvayanti)。[4] アグニはヴィシュヌであり²⁷、すべての生き物に入って、もろもろの氣息を保つのである。[5] さらにこの点についてサナトクマーラの詠ったいくつかの詩がある。
- (9) 一切の始源であるブラフマー神は²⁸、最初に汚れなき一切を創造した。ブラフマー神より生まれた不死のパラモンたちは、ヴェーダの祈祷によって²⁹天にとどまるのである³⁰。
- (10) パラモンたちの思考³¹、言葉、行為、信仰、そしてもろもろの苦行が、天と地を維持するのである。水が、冷たさによって甘さを(維持するのと)同様に³²。
- (11) 真実よりすぐれたダルマはない。母に等しい師はいない。繁栄(を与えること)に関しては、この世でもあの世でも、パラモンたちよりすぐれたものはいない。
- (12) パラモンたちが生活手段を欠いている国では³³、人々の雄牛は成長せず、馬も成長せず³⁴、贈物に際して(牛乳が満たされても)攪乳器は廻ることはなく³⁵、人々は墮落し、野蛮人 (dasyu) となって存在する。(韻律: Triṣṭubh³⁶)

²⁴P.,B.: brāhmaṇasya K. cakrur brāhmaṇasya

²⁵P. śatapathe hi brāhmaṇam bhavati B.,K.: śatapathe'pi hi brāhmaṇamukhe bhavati Cf.Hopkins[Great Epic]: Çat.Brāhmaṇa in Mbh., p.26.14.

²⁶P. brāhmaṇamukhe dānāhutiṃ juhoti B.,K.: brāhmaṇamukhenāhutiṃ juhoti

²⁷agnir viṣṇuḥ Cf.Gonda[1969]: Viṣṇu's high position expressed by a variety of identifications — he (Viṣṇu) was not only impersonated as Indra and Rudra, but Agni and other gods were considered forms of, or identical with, him, p.171.5.

²⁸brahmā Cs. brahmā, brāhmaṇaḥ / jagatsrṣṭāpi hiraṇyagarbhaḥ kaścid brāhmaṇaḥ / (brahmā とは、パラモンである。ヒラニヤガルバは、世界の創造者であっても、ある種のパラモンである)

²⁹brahmaghoṣair Cs. brahmaghoṣaiḥ, brāhmaṇocāritair vedaiḥ / (brahmaghoṣaiḥ とは、パラモンによって発せられたもろもろのヴェーダによって、という意味である)

³⁰P.,K.: tiṣṭhanty B. gacchanty

³¹P.,B.: matir K. ṛtaṃ

³²P. śaityād vāry amṛtaṃ yathā B. śaikyo vāg amṛtaṃ tathā K. śaityād vāyv amṛtaṃ tathā Cn. śaikyaḥ, śikyasaṃudāyaḥ / yathā śikyam gavyādīn dhārayati, evaṃ brāhmaṇo matyādīni ity arthaḥ / (śaikyaḥ とは、網の集合である。網が牛乳など(の容器?)を保持するように、パラモンの思考などが(維持する)、という意味である) Ganguli は、vāg amṛtaṃ は誤りとし、gavāmṛtaṃ という読みを提示している。(p.156, fn.2) Cs. (reading śaityād vāry amṛtaṃ yathā) yathā śaityenāpo 'mṛtaṃ svādu, svādutvaṃ svabhāvato dhārayanti / (冷たさによって、水たちが、amṛtaṃ, すなわち、甘さを、すなわち、甘いという性質をそれ自体として、維持するのである) Cv. vāk śaityāt, śītalatvāt sukhakarād iti yāvat, amṛtaṃ yathā dhārayati / (vāk 言葉が、śaityāt 冷たさによって、すなわち、心地よさを作ることによって、甘露を維持する、そのように、という意味である)

³³yeṣāṃ rāṣṭre brāhmaṇā vṛtīhīnāḥ (d 句) Cn. yeṣāṃ rājñāṃ, kṛṣyādihīnatvāt, tādrśā rājāno naṣṭās corās ca bhavantiṭy arthaḥ / (yeṣāṃ とは、王たちにとっては、という意味である。耕作などは消滅しているので、そのような王たちは消え、盗賊たちが存在している、という意味である)

³⁴P. naiṣāṃ ukṣā vardhate nota vāhā B.,K.: naiṣāṃ ukṣā vahati nota vāhā P. の vardhate のところを vahati と読む B.,K. の韻律は、Hopkins[Great Epic]: Illustrations of Epic Triṣṭubh Forms, p.467, No.20 に取り上げられている。

³⁵P. na gargaro mathyate saṃpradāne B.,K.: na gargaro mathyati saṃpradāne Ca. gargaraḥ kalaśaḥ / saṃpradāne, dhanasya pātre pratipādane / (gargaraḥ とは攪拌器である。saṃpradāne とは、贈物の器が与えられる時に(?), という意味である) Cn. gargaraḥ, dadhikṣuttailādinipīḍanayantram / (gargaraḥ とは、酪乳、砂糖黍、油などを搾る道具である)

³⁶a,d 句はŚālinī.

b,c 句は不規則。(b 句: _ _ _ _ _ c 句: _ _ _ _ _)。

- (13) (散文) [1] ヴェーダ・古譚・伝説の証拠によれば³⁷, パラモンたちとは, ナーラーヤナの口から生じた, 一切のアートマン, あらゆる行為者, あらゆる観念である³⁸. [2] 恩恵を与えるその神のことばと同時に³⁹, 最初にパラモンたちが現われた。そしてパラモンたちから他の諸階層が現われたのである。[3] かくしてパラモンたちは, 神とアスラたちよりすぐれている。パラモンたちは, かつてブラフマー神となった余によって⁴⁰, 余自身から (svayam) 現れたのであるから。神・アスラ・大仙たちは, (パラモンたちによって) すぐれた存在として確立され, 抑制されるのである⁴¹。
- (14) (散文) [1] インドラは, アハリヤーへの暴行のために, (彼女の夫の) ガウタマ仙によって, 黄色の (hari) 髭を持つ者とされた。[2] そしてインドラは, カウシカ仙によって, 睾丸をなくされ, (後に) 山羊の睾丸を持つ者となった。[3] アシュヴィン双神が (祭式の分け前を) 取るのを拒否するために金剛杵を持ち上げた城砦の破壊者インドラの腕は, チャヴァナ仙によって麻痺させられた⁴²。[4] (ルドラによる) 祭式の破壊に怒ったダクシャは, 一層苦行に集中して, もうひとつの目 (netrakṛtir anyā) をルドラの額に生じさせた。
- (15) (散文) [1] ウシャナスは, 三重の都城の破壊のために, 浄身儀式 (dīkṣā) に近づいてきたルドラの頭の髪を切り取って, (ルドラに) 投げつけた⁴³。[2] そこから蛇たちが現われた。[3] これらの蛇たちによって絞められたルドラの喉は青くなった。[4] あるいは, かつてのマヌ・スヴァーヤムブヴァの時代において⁴⁴, ナーラーヤナの手の綱によって捕まれたために⁴⁵, 青い喉になった⁴⁶。
- (16) (散文) [1] 甘露を得るために, 準備の儀式に (puraścaraṇatām) 入ったアンギラスの息子プリハスパティが⁴⁷水を汲んだのに, 水たちは澄まなかった。
[2] そこでプリハスパティは水たちに怒 (って言) った。[3] 「私が水を汲んだのに, 汚れたままで, 澄まないのだから, 今からは大魚・マカラ・魚・亀・虫と混じって⁴⁸汚れてしまえ」と。[4] それ以来水たちは, 水棲動物たちが混ざって存在しているのである。
- (17) (散文) [1] トゥヴァシュトリの息子ヴィシュヴァルーパは⁴⁹, 神々のプローヒタ祭官であり, アスラたちにとっては甥であった。[2] 彼は祭式の取り分を, 神々に対しては公然と, アスラたちはこっそりと与えた。

³⁷P.,B.: vedapurāṇetiḥāsaprāmānyān K. te ca purāṇetiḥāsaprāmānyān Cf.Hopkins[Great Epic]: Veda, Purāṇa and Itihāsa are all recokoned as authoritative, p.91.27; Possibly the prose in xii,343,20 (MBh.XII.329.13) may have once been verse. It begins with *vedapurāṇetiḥāsaprāmānyāt*, Illustrations of Epic Triṣṭubh Forms, p.463, No.11.

³⁸P. sarvabhāvanās B.,K.: sarvabhāvās

³⁹P. vākyasamakālaṃ hi tasya devasya varapradasya B.,K.: vākyasaṃnyamakāle hi tasya varapradasya devadevasya

⁴⁰P. yadā mayā brahmabhūtena B. ya eva mayā brahmabhūtena K. vedamayā brahmabhūtena

⁴¹K. はこの文の後に, teṣāṃ prabhāvaḥ śrūyatām / (彼らの力について聞け。) という文言を挿入している。

⁴²P. stambhito bāhuḥ B.,K.: stambhitau bāhū

⁴³P. śiraso jaṭā utkr̥tya prayuktāḥ B. jaṭāḥ śiraso utkr̥tya prayuktās K. jaṭāḥ śiraso utkr̥tyāgnau prayuktās

⁴⁴pūrve ca manvantare svāyaṃbhuve Cf.Hopkins[1903]: From here on, the later epic is full of allusions to the Manvantaras, p.46.27.

⁴⁵P.,K.: nārāyaṇahastabandhagrahaṇān . nārāyaṇahastagrahaṇān Cs. nārāyaṇo badarikāśramavāsī / so 'pi kaścid brāhmaṇaḥ / (nārāyaṇaḥ とは, バダリカーの隠棲処の住人であり, 彼もまた一人のパラモンである)

⁴⁶P. nīlakaṇṭhatvam eva vā B. nīlakaṇṭhatvam eva ca K. nīlakaṇṭhatvam upanītaḥ

⁴⁷P. amṛtotpādāne puraścaraṇatām upagatasyāṅgirasō br̥haspater B. amṛtotpādānapuraścaraṇatām upagatasyāṅgirasō br̥haspater K. amṛtotpādāne punarbhakṣaṇatām vāyusamīkṛtasya viśasyopagataś ca tadbhakṣaṇam iti tannimitam eva candrakalā brahmaṇā nihitā / āṅgirasabr̥haspater

⁴⁸P. jhaṣamakaramatsyakacchapajantusaṃkīrṇāḥ B. jhaṣamakaramatsyakacchapajantubhiḥ K. jhaṣamakaramatsyakacchapajantumaṇḍūkasamkīrṇāḥ

⁴⁹ヴィシュヴァルーパ (トリシラス) とインドラとの確執のエピソードは, MBh.V.9 に見られる。

叙事詩の宗教哲学

- (18) (散文) [1] そこで、アスラたちは、ヒラニヤカシプを先頭にして、ヴィシュヴァールーパの母である姉に恩恵を懇願した。[2] 「おお、姉上、あなたの息子、トヴァシュトリの息子、三つの頭をもつヴィシュヴァールーパは、神々のプローヒタ祭官として、祭式の取り分を神々には公然と与え、我々にはこっそりと与えました。[3] その結果、神々は太り、我々はやせ衰えました。[4] ですから、あなたは、私たちに与えるように、彼に頼んで下さい」と。
- (19) (散文) [1] そこで母は、その時ナンダナの森に行っていたヴィシュヴァールーパに言った。[2] 「息子よ、どうしてお前は、敵側を太らせ、叔父の側を滅ぼすのですか。[3] このようなことはすべきではありません」と。[4] ヴィシュヴァールーパは、母の言葉はなおざりにすべきではないと考えて、恭しく礼をして、ヒラニヤカシプのところへ行った。
- (20) (散文) [1] ヒラニヤカシプは、ヒラニヤガルバの息子ヴァシシュタ仙から呪いを受けた。[2] 「ホートリ祭官として別の者を選んだのだから⁵⁰、お前は祭式を完了することはなく、未だかつて存在したことの無い者によって殺されるであろう」と。[3] ヒラニヤカシプは、呪いかけられたために殺された。
- (21) (散文) [1] ヴィシュヴァールーパは、母の側の繁栄を望み、激しく苦行を行なった。[2] 彼の誓約を破壊するために、インドラは、多くの美しいアプサラスたちに(彼を誘惑するよう)命じた。[3] ヴィシュヴァールーパの心は、彼女たちを見て動揺した。そして、まもなく⁵¹そのアプサラスたちに対する執着が生じた。[4] 彼が執着しているのを知って、アプサラスたちは言った。「私たちはやって来たように去るでしょう」と。
- (22) (散文) [1] トヴァシュトリの息子は彼女たちに言った。[2] 「どこへ行くのですか。しばらく留まりなさい。私とともに幸せになりましょう」と。[3] 彼女たちは彼に言った。[4] 「私たちは、天女アプサラスです。私たちはかつて、恩恵を与える神インドラを主人として選びました」と。
- (23) (散文) [1] そこでヴィシュヴァールーパは、彼女たちに言った。「今日、インドラを含め神々はいなくなるであろう」と。[2] そしてもろもろのマントラを呪した。[3] それらのマントラによって、三つの頭をもつ者(トリシラス=ヴィシュヴァールーパ)は強大となった。[4] 一つの口で、祭式を行う再生族たちによって⁵²全世界の祭式において正しく供されたソーマを飲んだ。もう一つの口で水たちを⁵³、もう一つの口で、インドラとともに神々を(飲もうとした)。[5] そこで、ソーマを飲むことによって四肢すべてを增強させ⁵⁴、強大となる者を見て、インドラは不安になった。
- (24) (散文) [1] 神々は、インドラ神とともに⁵⁵ブラフマー神に近づき、そして言った。[2] 「すべての祭式において正しく供されたソーマが、ヴィシュヴァールーパによって飲まれています。[3] 私たちに

⁵⁰tvayānyo vr̥to hotā Cs. hotā hiranyakaśīpor vasiṣṭhaḥ pūrvam āsīt / sa vasiṣṭho hotāram anyam viśvarūpaṃ dṛṣtvā kruddhaḥ / (ヒラニヤカシプのホートリ祭官は以前はヴァシシュタ仙であった。そのヴァシシュタ仙は、ヴィシュヴァールーパが別のホートリ祭官であるのを見て、怒った)

⁵¹nacirād eva Cf. Oberlies[Grammar]: 10.4. Excursus: Nominal composition, (c) na-compounds, *nacirāt*, p.360.3.

⁵²P. dvijaiḥ B.,K.: yathāvad dvijaiḥ

⁵³P. ekenāpa B.,K.: ekenānam

⁵⁴somapānāpyāyitasarvagātram Cf. Hara[1987]: *āpyai-*, vocabulary of invigoration, p.145.8.

⁵⁵P. devās ca te sahendreṇa B.,K.: te devāḥ sendrā

は、取り分がなくなりました。[4] アスラの側は増大し、我々はやせ細っています。[5] すぐに安寧 (śreyas) を私たちにお与え下さい」と。

- (25) (散文) [1] ブラフマー神は彼らに言った。「ブリグ家系の聖仙ダディーチャが苦行を行っている。[2] 身体を捨てるように⁵⁶(彼に) 恩恵を求めよ。[3] 彼のもろもろの骨で金剛杵 (vajra) を作るべし」と。
- (26) (散文) [1] 神々は、至尊の聖仙ダディーチャが苦行を行っている所へやって来た。[2] 神々は、インドラと共に、彼に近づいて言った。「尊者よ、苦行が順調で障害なきことを」と⁵⁷。[3] ダディーチャ仙は神々に言った。「よく来られた。あなたの方のために何かなされるべきですか⁵⁸。私は、あなた方が言うことを行うでしょう」と。[4] 彼らは彼に言った。「尊者は、世界の幸福のために、身体を棄却を行って下さい」と⁵⁹。[5] すると、快と苦を等しくする偉大なヨーガ行者⁶⁰、ダディーチャ仙は、いつも通りに心散乱せず (avimanas), 自己に集中して、身体を棄却を行った。
- (27) (散文) [1] 彼が最高のアートマンへと去った時⁶¹、創造者はそのもろもろの骨を集めて金剛杵を作った。[2] 破壊されず、それに勝るものなき、バラモンの骨より生じ、ヴィシュヌの入り込んだその金剛杵によって、インドラはヴィシュヴァルーパーを殺した。[3] そして彼の頭たちの切断を行った。[4] そのすぐ後、ヴィシュヴァルーパーの四肢の摩滅によって生じた、すなわちトヴァシュトリ (の息子) より生じた、敵ヴリトラをインドラは殺したのである。
- (28) (散文) [1] インドラは、その二重になったバラモン殺しにおける恐れのために、神の王位を捨てて、水たちの中に生じた、マーナサ海中の冷たい蓮に入った。[2] そこで、超能力との結合によって、原子の大きさになって⁶²、蓮の節に入った。
- (29) (散文) [1] そこで、シャチーの夫、三界の守護者 (インドラ) が、バラモン殺しの恐れによって姿を消したので、世界には支配者がいなくなった。[2] 神々には、ラジャスとタマスとが入り込んだ。[3] もろもろのマントラは発せられなかった。[4] 大仙たちには羅刹たちが現われた。[5] ヴェーダのことば (brahman) は崩壊した。[6] インドラ神のいない、力のない、もろもろの世界は、容易に攻撃されるものとなった。
- (30) (散文) [1] そこで、神々と聖仙はアーユスの息子ナフシャを神々の王として灌頂した。[2] ナフシャ

⁵⁶P. yathā kalevaram jahyāt B. sa yathā kalevaram jahyāt tathā vidhīyatām K. sa yathā kalevaram jahyāt

⁵⁷P. tapasaḥ kuśalam avighnaṃ ceti B. tapaḥ sukuśalam abhinnaṃ ceti K. tapasā kuśalam avighnaṃ ceti

⁵⁸P. bhavadbhyaḥ kiṃ kriyatām B. bhavadbhya ucayatām kiṃ kriyatām K. bhavatām ucayatām kiṃ kriyatām

⁵⁹K. はこの後に次の一節を挿入している。(=MBh.XII.871*)

‘evam ukto dadhīcas tāt abravīt / sahasraṃ varṣānām aindraṃ padam avāpyate mayā yadi jahyām / tathety uktvendrah svasthānam dattvā tapasvy abhavat / indro dadhīco `bhavat / tāvat pūrveṇa(871* pūrṇe) sendrā devā āgaman kālo `yaṃ dehanyāsāyēti /

(このように言われて、ダディーチャ仙は彼らに言った。「もし身体を捨てるならば、千年間私は、インドラの地位を得るであろう」と。インドラは、「わかりました」と言って、自らの地位を与え、苦行者となった。インドラはダディーチャ仙となった。まずは神々が、インドラと共に、「今や、身体棄却の時である」とやって来た)

⁶⁰mahāyogī Cf.Hopkins[1901]: Dadhīca, a mahāyogin, p374.24. MBh.V.9 には、ダディーチャの骨から金剛杵をつくるというエピソードはない。

⁶¹P. tasya paramātmany avasrte B.,K.: tasya paramātmany apasrte K. はこの章句の前に次の一節を挿入している。(=MBh.872*)
śrutir apy atra bhavati indro dadhīcosthibhiḥ kṛtam (cf.Ṛgveda I.84.13) iti /

(この点に関して、インドラはダディーチャのもろもろの骨によって作った (? kṛtam), という天啓聖典もある。)

⁶²aiśvāryayogād aṇumatro bhūtvā Cf.Hopkins[1901]: power of Yogin, becoming the size of an atom, p.358.20.; aiśvāryayoga ignored ith the Udyoga parallel, p.374.24.

叙事詩の宗教哲学

は、額に輝く、あらゆる力を奪う五百の光によって、インドラの天界を守護した。[3] ところでもろろの世界は、本来の状態 (prakṛti) を獲得し、健全となった⁶³。

- (31) (散文) [1] そこでナフシャは言った。[2] 「シャチャーを除いて、インドラが享受していたものはすべて、私のものとなった」と。[3] 彼はこう言ってシャチャーに近づき、彼女に言った⁶⁴。[4] 「美しい女よ、私は神々のインドラである。私に従うがよい (bhajasva)」と。[5] シャチャーは彼に返答した。[6] 「あなたは、本来 (prakṛtyā), ダルマを好み、月種族の家系に生まれた者です。[7] 他人の妻を侮辱してはなりません」と。
- (32) (散文) [1] するとナフシャは彼女に言った。[2] 「インドラの地位は私が占めている。[3] 私はインドラの王位と宝を取った。この点についていかなる不正もない。あなたもインドラに属する者である」と。[4] 彼女は彼に言った。[5] 「私にはまだ達成していないある誓約 (vrata) があります。[6] その(終了の) 沐浴が終わった時、何日かして、私はあなたに近づきましょう」と。[7] シャチャーにこのように言われて、ナフシャは去った。
- (33) (散文) [1] そこでシャチャーは、苦しみと憂いに悩み、夫に会いたいと願う一方、ナフシャへの恐れにとりつかれて、ブリハस्पティのところに行った。[2] ブリハस्पティは、近づいて来る彼女を見て、禅定に入り、夫への義務に専心しているの知って⁶⁵、言った。[3] 「お前はその誓約と苦行とを具えている。恩恵を与える女神ウパシュルティを呼び出さない⁶⁶。[4] 彼女はお前をインドラに会わせるであろう」と。
- (34) (散文) [1] そこで彼女は、大禁戒を実行して、恩恵を与える女神ウパシュルティをもらもろのマントラによって呼び出した。[2] ウパシュルティはシャチャーの近くに來た⁶⁷。[3] そして彼女に言った。「この私はあなたに呼び出されてここにいます⁶⁸。[4] あなたにとって何か善いことができるでしょうか」と。[5] シャチャーは、頭を下げて女神に言った。「至尊者よ、私を夫に会わせて下さい。あなたは真実の考えをもっている方です⁶⁹」と。[6] 彼女は、シャチャーをマーナサ海に導いた。[7] そこで蓮の節の中にいるインドラ神に会わせた。(Cf.MBh.V.14-15)
- (35) (散文) [1] インドラは瘦せて憔悴した妻を見て、考えた。[2] 「ああ、今日は私に大きな苦しみが出来てきた。[3] 妻は、消えた私を探して、苦しみにさいなまれてやって来た」と。[4] インドラ神は彼女に言った。「どうしている」と。[5] 彼女はインドラ神に言った。[6] 「ナフシャが私を呼び出しています。[7] 私は、彼に刻限 (kāla) を設けました」と。
- (36) (散文) [1] インドラは彼女に言った。[2] 「行きなさい。[3] そしてナフシャに言いなさい。『あなたは、聖仙によって曳かれた、未だかつてない乗物に乗って、私を連れて行ってください。[4] なぜ

⁶³P. svasthās ca babhūvuḥ B.,K.: svasthās ca hr̥ṣṭās ca babhūvuḥ

⁶⁴P.,B.: agamad uvāca cainām K. agamad bṛhaspatigṛhe cāsīnām uvācainam

⁶⁵dhyānam praviśya bhartṛkāryatatparam̐ jñātvā Cf.Hopkins[1901]: a divine power of knowing another's thought by simple meditation, *dhyānam praviśya*, p.360.28.

⁶⁶upaśrutim āhvāya Cv. ārabdhavākyaṅkūlaśrutir upaśrutir ucyate / (発せられた言葉に従って聞くことが、upaśruti とされる)

⁶⁷śacīsamīpam agāt Cv. upaśrutiḥ dṛśyā satī sāhāyāṃ cakre / anyeṣām ar̥ṣyaivopakarotīti bhāvaḥ / (ウパシュルティは、本当に姿を顕わして、助けた。他の者たちに対しては、姿を見せることなく補助する、という意味である)

⁶⁸P. cainām iyam asmi tvayopahūtopasthitā B.,K.: cainām iyam asmīti tvayā hutopasthitā

⁶⁹P. tvam̐ satyā matā cetī B. tvam̐ satyā ṛtā cetī K. tvam̐ satyā matā satām̐ cetī

なら、インドラは多くの心を喜ばせる車輿をもって、私はそれらに乗っていました。乗っていたのですから。[5] あなたはそれとは別の車輿で来てください』と。[6] 彼女は、このように言われて、喜んで帰った。[7] インドラもまた再び、蓮の節の中に入った。

- (37) (散文) [1] さて、ナフシャは、インドラの妻が来るのを見て、言った。「期限がきた」と⁷⁰。[2] シャチーは彼にインドラに言われた通りに言った。[3] 彼は、大仙たちに曳かれた車輿に乗って、シャチーの近くに来た。
- (38) (散文) [1] その時、ミトラとヴァルナの子、壺を母胎とする大仙アガスティヤは、ナフシャによって多くの大仙たちが苛まれているのを⁷¹見た。[2] そして、ナフシャは両足で(アガスティヤ仙に)触れた。(Cf.MBh.III.178.37) [3] そこで、彼はナフシャに言った。「為すべきでないことを行なう者よ、悪しき者よ、地に落ちよ。[4] 大地と山々がある限り、蛇であれ⁷²」と。[5] ナフシャは、大仙の言葉と同時に、その車輿から落ちた。
- (39) (散文) [1] すると三界は再び支配者がいなくなった。[2] それゆえ、神々と聖仙たちは、至尊のヴィシュヌにインドラのために保護を求めた。[3] そして彼に言った。「至尊者よ、バラモン殺し(の罪)によって制圧されたインドラを救って下さい」と。[4] そこで恩恵を与える神は、彼らに言った。「インドラは、ヴィシュヌのためのアシュヴァメーダ祭を祭るがよい⁷³。[5] そうすれば、彼は本来の地位を得るであろう」と。
- (40) (散文) [1] その後、神々と聖仙たちはインドラ神を見つけることができなかった。そこでシャチーに言った。「美しい女よ、行って、インドラを連れて来なさい」と。[2] 彼女は再び、その湖に行った。[3] インドラは、その湖から出て⁷⁴、プリハスパティのところへ行った。[4] プリハスパティはインドラのために大祭アシュヴァメーダを(贈与として)行なった。[5] そして⁷⁵プリハスパティは、黒い斑点をもつ、供物にふさわしい馬を放して⁷⁶、それを乗物とし⁷⁷、マルト神群の主インドラに、本来の地位を得さしめた。
- (41) (散文) [1] そして、神々の王インドラは、神々と聖仙たちに讃えられつつ、罪から開放されて、第三の天界に住んだ。[2] インドラは、バラモン殺しの罪を、妻・火・木・牛という四つの場所に分けた⁷⁸。[3] このようにインドラは、バラモンの威力と威光によって強められ、敵の殺害を行なって、

⁷⁰pūrṇaḥ sa kāla itī K. はこの前に次の言葉を挿入している。

yan me tvayā kālaḥ parikalpitaḥ / (あなたが私に対して決めた時は)

⁷¹P. vikriyamāṇāms B.,K.: dhikkriyamāṇāms

⁷²yāvad bhūmir girayaḥ ca tiṣṭheyuḥ Cf.Hopkins[Great Epic]: Parallel Phrases in the two Epics, p.431. 3.

⁷³aśvamedhaṃ yajñam vaiṣṇavam Cf.Hopkins[Great Epic]: a new feature in the Aṣvamedha sacrifice, no killing of animals at an aṣvamedha, p.377.13.

⁷⁴P. samutthāya B. pratyutthāya K. pratyutthāya gatvā sarasvatīm

⁷⁵P. tataḥ B.,K.: tatra

⁷⁶kṛṣṇasāraṇagam medhyam aśvam utsrjya Cn. kṛṣṇasāraṇagam, kṛṣṇasāramṛgavac chubhrodarakanṭhādhobhāgam / (kṛṣṇasāraṇagam とは、白黒の斑点のある鹿のように、美しい腹・喉・下半身をもつ、という意味である) Ganguli: substituting a black antelope for a good steed every way to fit to be offered up in sacrifice, p.161.26. Esnoul[1979] も同様に解している。(p.155, No.52)

⁷⁷P.,B.: vāhanam K. pāvanam

⁷⁸P.,B.: vanitāgnivanaspatigoṣu vyabhajat K. vyabhajat vanitāvṛkṣagiryavaniṣu /

K. はこの後に以下の文を挿入している。(=MBh.XII.874*)

本来の位置を得たのである⁷⁹。

- (42) (散文) [1] かつて大仙バラドヴァージャは天空のガンガー川に行き沐浴した時⁸⁰、三步を歩むヴィシュヌがそこに到達した。[2] ヴィシュヌは、バラドヴァージャによって、水をもった⁸¹手で胸を打たれ、(卍字形の)印のついた胸を持つ者⁸²となった。
- (43) (散文) [1] 大仙ブリグによって呪われたアグニは、すべてを食べるようにされた⁸³。
- (44) (散文) [1] アディティは、神々がそれを食べてアスラたちを殺すようにと、神々の食べ物を調理した。[2] そこへブダが、誓約の実行が完了したので、やって来た。[3] そしてアディティに言った。「施しを下さい」と。[4] そこでアディティは、「最初に神々が食べねばならない、他の者が食べるべきではない」と言って、施しを与えなかった。[5] 施しの拒否によって怒り、バラモンとなったブダによって⁸⁴、「卵」(aṇḍa)と名づけられたヴィヴァスヴァットの第二の誕生において、(母である)アディティの卵は破壊された⁸⁵。[6] そして、輝きをもつ(vivasvān)シュラーダデーヴァ(ヴィヴァスバット)は⁸⁶「マールタンダ(破壊された卵)」と呼ばれるようになった。
- (45) (散文) [1] ダクシャには六十人の娘が⁸⁷いた。[2] そのうちの十三人をカシュヤパに、十人をダルマに、十人をマヌに、二十七人をソーマ(indu)に与えた。[3] 彼女たちは等しくナクシャトラ(星)と呼ばれていたのに⁸⁸、ソーマはよりローヒニーを好んだ⁸⁹。[4] このため他の妻たちは嫉妬して、

vanitāsu rajaḥ / vṛkṣeṣu niryāsaḥ / giriṣu śimbaḥ (874* śambha) pṛthivyām ūsaraḥ te 'spr̥śyāḥ / tasmād dhavir alavaṇaṃ pacyate /

(妻たちおける経水(?), 木々における樹脂, 山々における豆類(?), 地における塩, これらは触れられるべきではない。それ故, 供物は塩なしで調理されるのである。)

⁷⁹K. はこの第 41 節の後に、次の 4 行を挿入している。(=MBh.XII.875*)

'nahuṣasya śāpamokṣārthaṃ (*875 -nimittaṃ) devair ṛṣibhiḥ ca yācyamāno 'gastyah pṛāha /

(アガステイヤ仙は、神々と聖仙たちによって、ナフシャにかけられた呪いを解くように懇願されて、言った。)

yāvāt svakulajaḥ śrīmān dharmarāḍ [bhrātr̥bhir yutaḥ /

(「幸運をもち、弟たちを伴うダルマの王(ユディシュティラ)が、(汝ナフシャ)自身の家系より生まれる。)

bhīmas tasyānujaṣ taṃ tvam grahītā tu (*875 [] の部分欠) yudhiṣṭhiraḥ /

(彼の弟にピーマがいる。汝は彼(ピーマ)を捕える者となろう。ユディシュティラが、)

kathayitvā svakān prāsnāms tvām ca taṃ ca (875* svam bhīmaṃ ca) vimokṣyati //

(汝のもろもろの質問に答えた時、その時に、汝と彼とを開放するであろう。)(Cf.MBh.III.176.21, 177.12)

⁸⁰P. upāspr̥śams B.,K.: upāspr̥śat Ganguli: What is meant, therefore, by 'Bharadwaja touching the water' is that Bharadwaja was saying his prayers, p.161, fn.1.

⁸¹P.,B.: asalilena K. salakṣaṇena

⁸²salakṣaṇoraskaḥ Ganguli: a mark (called Sreevatsa), p.162.2. 中村 [2000]: 相似の卍字の印 (p.979, No.54) Cf.MBh.XII.330.65)

⁸³P. upanītaḥ B.,K.: upānītaḥ

⁸⁴budhena brahmabhūtena B.,K. はこの後に次の句を挿入している。(=MBh.XII.876*)

brahmabhūtenāditiḥ śaptā aditer udare bhaviṣyati vyathā /

(バラモンとなった(ブダによって) アディティは、「アディティの腹に苦痛が生じるであろう。」と呪われた。)

⁸⁵P. aṇḍaṃ mārītaṃ adityāḥ B.,K.: aṇḍaṃ mātūr adityā mārītaṃ

⁸⁶abhavac chrāddhadevaḥ Cs. śrādhasābdena śrāddhāpūrvakakarmāṇy ucyante / sarvakarmaṇāṃ devaḥ patīḥ manvantarādau śrāddhadevaḥ savitaiva / (śrādha の語によって、śrāddha 信仰にもとづくもろもろの祭式が言われている。あらゆる祭式の devaḥ 神、すなわち、主が、最初のマヌ・ヴァイスヴァタ時代におけるシュラーダデーヴァ、すなわち、太陽神サヴィトリである) Cv. śrāddhadevaḥ, vasurudrādityeṣu śrāddhabhojiṣv ādityo 'bhūd ity arthah / (śrāddhadevaḥとは、ヴァス、ルドラ、アーディトヤという、祖霊祭(の供物)を享受する者たちの中で、アーディトヤであった、という意味である)

⁸⁷P. vai duhitarah B.,K.: yā vai duhitarah

⁸⁸tāsu tulyāsu nakṣatrākhyāṃ gatāsu Cf.Hopkins[1903]: the asterisms, first counted as twenty-seven or as twenty-eight, p.30.1.

⁸⁹P. abhyadhikāṃ pṛtīm akarot B.,K.: abhyadhikāṃ pṛtīmān abhūt Cf.Hopkins[1902]: (abhyadhikam, used as the comparative-maker of adjectives, p.126.5.

父の前に行って、このことを話した。[5]「尊者よ、私達は等しい輝きをもつのに、ソーマはとりわけローヒニーを好みます」と。[6]彼は言った。「肺病がソーマに入り込むであろう」と⁹⁰。

- (46) (散文) [1] ダクシャの呪いによってソーマ王に肺病が入り込んだ [2] 肺病にとりつかれたソーマはダクシャのところに行った。[3] ダクシャは彼に言った。「お前は平等に振る舞っていない」と。[4] そこで聖仙たちはソーマに言った。「お前は肺病によって痩せるのだ。[5] 西方の海にヒラニヤサラスという沐浴場がある。[6] そこに行って、自分を洗い清めるべし」と。[7] そこでソーマはヒラニヤサラスの沐浴場へ行った。[8] 行って、自分を洗い清めた⁹¹。[9] 沐浴して、自らを罪から解き放った。[10] そこでソーマは沐浴場で輝いた。その時以来その沐浴場はプラバーサ(輝き)という名前で知られるようになった。[11] その呪いのために、今日でもソーマは新月の夜には姿は見えなくなるのである。[12] (ソーマは) 満月の大きさにある時は、雲の縞に覆われて美しい姿を示すのである。[13] (ソーマは) 雲のごとき色になり、そこには汚れなきうさぎの姿が現われるのである。

- (47) (散文) [1] 大仙ストウーラシラスはメール山の東北の方角で⁹²苦行を行った。[2] あらゆる香りを運ぶ清浄な風があらゆる方向に吹き、その苦行を行う者の身体に触れた。[3] 苦行によって熱された身体をもつその痩せた者は、風に吹かれて、心の満足に至った。[4] そこで風の扇によって生じた満足をもつ彼に対して、森の樹木たちはすぐに美しい花を見せなかったので⁹³、彼はこれらの樹木を、「お前たちは、どんな時でも花をもつことはないであろう」と呪った⁹⁴。

- (48) (散文) [1] かつてナーラーヤナは、世界の安寧のために、ヴァダヴァームカ(馬の口)という名の
大仙として現れた。[2] メール山で苦行を行うナーラーヤナが海を呼び出した時、海は来なかった。
[3] 怒った彼の身体の手足の熱によって、海は、動かない水をもつものとされた。[4] そして、これに、汗水のごとき塩の性質が生じた。[5] そして言われた。「汝は飲めなくなるであろう。[6] 汝の水は、ヴァダヴァームカと名づけられた者によって飲まれると、甘くなるであろう」と。[7] このようにして今日でも、(ナーラーヤナに) 従順なヴァダヴァームカと名づけられる者によって、海の水は飲まれるのである⁹⁵。

- (49) (散文) [1] ルドラは雪山の娘ウマーを愛した。[2] 大仙ブリグも雪山にやって来て⁹⁶、言った。「この娘を私に与えよ」と。[3] 雪山は彼に言った。「ルドラが望まれる夫である⁹⁷」と。[4] ブリグは雪山に言った。「私は、娘を望むことを心に決めたのに、汝に拒否された。それ故、汝はもろもろの宝

⁹⁰P. yakṣmainam āveksyatīti B. yakṣmainam āviśyeteti K. yakṣmainam āveksyata iti Cf.Hopkins[Epic Mythology]: consumption of Soma, p.90.31.

⁹¹P. cātmanah snapanam akarot B.,K.: cātmanah secanam akarot

⁹²P. digbhāge B.,K.: digvibhāge

⁹³P. puṣpaśobhāṃ na darśitavanta iti B.,K.: puṣpaśobhāṃ nidarśitavanta iti

⁹⁴sa etān śaśāpa na sarvakālaṃ puṣpavanto bhaviṣyatheti Cs. bho vṛkṣāḥ, yūyaṃ puṣpaphalaih śramaharair vāyoḥ samakālam eva mama kṣuttrīśramāṃ nopahr̥tavantaḥ, nopasthitavantaś ca / ato bhavatāṃ sarvakālaṃ phalapuṣpasamīddhir na bhavatīty arthaḥ / (おお樹木たちよ、お前たちは、疲れを取る花と果実によって、風と同時に、私の飢えと渇きによる疲れを取り去らなかつた、すなわち、私の側に立たなかつた。従って、お前たちは、どんな時でも果実と花が豊かになることはない、という意味である)

⁹⁵P. toyaṃ sāmudraṃ piyate B.,K.: toyaṃ samudrāt piyate K. はこの後に次の語句を挿入している。(=MBh.XII.877*)

'punar umā dakṣakopād dhimavato girer duhitā babhūva /

(一方ウマーはダクシャの怒りによって雪山の娘となった)

⁹⁶P. āgamy B.,K.: āgatyā

⁹⁷P. abhilaṣito varo rudra iti B. abhilaṣito varo rudra iti K. abhilaṣito varo duhitur hi rudra iti

叙事詩の宗教哲学

石をもつことはないであろう⁹⁸」と。[5] その日以来、聖仙の言葉はそのように実行されている。

- (50) (散文) [1] このようにバラモンたちには偉大さ (māhātmya) がある。[2] (バラモンたちの偉大さによって) クシャトリヤも⁹⁹、永遠不変の大地を妻として得て、享受したのである。[3] このようにバラモンはアグニとソーマからなる。[4] バラモンによって世界は維持されているのである。

[330章] (B.342章 (v.66-142), C.13224-13314, K.352章) (ナーラーヤナ章 (10) ナーラーヤナの異名¹⁰⁰)
聖なる至尊者は言った¹⁰¹。

- (1) 太陽と月は、光と名づけられた余の髪によって、いつも¹⁰²世界を(月は)目覚めさせ、(太陽は)熱しつづ、別々に昇るのである¹⁰³。
- (2) アグニ(太陽)とソーマ(月)によって為されたこれらの行為による目覚めと熱によって、世界には歡喜が生じるであろう。パーンドウ王の息子よ、余は、歡喜に髪を逆立った者であり¹⁰⁴、支配者であり、恩恵を与える者であり、世界の創造者である。
- (3) 余は、祈祷による召喚と結びつくことによって¹⁰⁵、もろもろの祭式における取り分を取る (hare)。そして、余の色はよき黄色 (hari) である。従って、余はハリとして¹⁰⁶伝えられている。
- (4) (余は)人々にとって¹⁰⁷住居であり、核心であり¹⁰⁸、天則であると考えられた。従って、余は、『天則の住居』と¹⁰⁹、そして『真実の者』と¹¹⁰、バラモンたちによって呼ばれるのである。
- (5) 余は、かつて洞穴の中に没して (guhāgata) 消えた大地を見出した (avindam)。このため神々は、余を「ゴーヴィンダ (govinda)」と、幾多の言葉を用いて稱賛した¹¹¹。

⁹⁸tasmān na ratnānām bhavān bhājanaṇam bhaviṣyati Cs. bhājanaṇam na bhavasi, tvadutpannāni ratnāny anyair apahr̥tāni bhaviṣyati arthaḥ / (bhājanaṇam na bhavasi とは、汝に生じたもろもろの宝は、他の者たちによって奪われるであろう、という意味である)

⁹⁹p. kṣatram api B.,K.: kṣatram api brāhmaṇaprasādā eva

¹⁰⁰(Cf. Matsubara[1994]: Concept of the Supreme God, the name Brahman not found in MBh. XII.330.1-67, p.105, Reference No.1)

¹⁰¹p. śrībhagavān uvāca B. ucyate K. bhagavān uvāca / nāmnam niruktaṇ vākṣyāmi śr̥ṇuṣvaikāgramānasaḥ (=MBh. XII.878*)

¹⁰²p.,K.: śasvat keśair me aṃśusaṃjñitaiḥ B. cakṣuḥ keśāś caivāṃśavaḥ smṛtāḥ Sandhi irregular: me aṃśusaṃjñitaiḥ Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.5. Absence of *abhinihita-sandhi*, 1.1.5.1. -e a-, p.20.2.

¹⁰³p. uttiṣṭhataḥ pṛthak B.,K.: uttiṣṭhate pṛthak Cv. pṛthak, ahni ekaḥ, niśi ekaḥ / (pṛthak とは、昼は一方が、夜は他方が、という意味である)

¹⁰⁴hr̥ṣikeśo 'ham Cn. jagad dharṣayato yasmāt tasmāt tau hr̥ṣī, agniṣomau keśau, aṃśū yasya sa hr̥ṣikeśaḥ / (世界を歡喜させるのであるから、この両者は歡喜である。アグニとソーマが髪、すなわち、光である者、その者が hr̥ṣikeśa である) Cv. hr̥ṣī iti ikārāntam padaṇ vā / tadā hr̥ṣyau keśau yasyeti samāsaḥ / (あるいは、歡喜 hr̥ṣī とは、i の長母音を末尾とする語である。その場合には、二つの髪を二つの歡喜とする者、という(所有)複合語である。)

¹⁰⁵p. iḍopahūtayogena B. iḍopahūtayogena K. iḍopahūtaṇ geheṣu Cn. iḍopahūtā saha divā (Āśvalāyana Śrautasūtra 1.7.7) ityādiantreṇāhūto 'haṃ tadyogād yajñabhāgaṇ hare, haraṇaṇ kurve, iti hariḥ / (「イダーは、太陽と共に、呼びよせられた」などのマントラによって呼び出された余は、それとの結合によって、祭式の取り分を, hare, すなわち、取ることを行うので, hari と言われる)

¹⁰⁶harir ahaṇ Cn., Cp.: hariḥ harinmanitulyaḥ (Cp. hiraṇyamaṇi-) / (hariḥ とは、緑の宝石のごとし (Cp. 金の宝石のごとし)、という意味である)

¹⁰⁷p.,K.: lokānām B. bhūtānām

¹⁰⁸p. dhāma sāro hi B.,K.: dhāmasāro hi Cn. dhāmasāro lokasāravācī / (dhāman の語は、世界の核心であることを述べるものである)

¹⁰⁹ṛtadhāmā Cn. ṛtam abādhitam, dhāma sattāsphūrtirūpaṇ, yasya sa ṛtadhāmety arthaḥ / (ṛtam 天則、すなわち、妨げのないものが、dhāman 住居とは、最高存在の顕現した姿である。それを所有するものが ṛtadhāma (天則の姿をもつ者) という意味である。 Cp. dhāma rāstre lokasāravācī / ṛtam ca paramārthasatyam cāham / puṃstvam saṃjñāśabdāt vāt / (dhāman 住居は、国土の中で世界の核心であることを述べている。ṛtam 天則とは、最高の真実であり、私がそれである。(ṛtadhāmā と) 男性形なのは固有名詞だからである)

¹¹⁰p. satyaś cāham B.,K.: sadyaś cāham Ca. sataś cāsataś ca dhāraṇāt satyaḥ / (sat 有と asat 無を保持することから, satya と言われる) Cv. satyaḥ saṃm apekṣitaḥ / (satyaḥ とは、よき妻に依存した (?), という意味である)

¹¹¹p. mām devā vāgbhiḥ samabhituṣṭvuh B.,K.: tenāham devair vāgbhir abhiṣṭvuh

- (6) 『禿頭』という名称に関しては、髪の毛がなくなった¹¹²者によって浸透された者は、何であつても、『禿頭の者』と伝えられている¹¹³。
- (7) 思慮深い聖仙ヤースカは多くの祭式において余を「禿頭の者」と詠った。このために、余はこの秘密の名前をもつのである。
- (8) 高い知性をもつヤースカ仙は¹¹⁴、余を「禿頭の者」と讃えたので、余の恩寵によって、地下界に消えた「ニルクタ(語源の書)」を得た¹¹⁵。
- (9) 余は、かつて生まれたことはなく、現在生まれることもなく¹¹⁶、将来生まれることも決していない。余はあらゆる生き物の知田者(kḍetrajña)である。それゆえ、余は『不生の者』と伝えられている。
- (10) 余はこれまでに愚かなこと、野卑なことは言ったことはない。ブラフマー神の娘リターは、余にとっては、真実の女神¹¹⁷サラスヴァティーである。
- (11) クンティーの子よ、余は、有(sat)も無(asat)も、自分の中に、すなわちブラフマー神の座所である蓮の花に¹¹⁸、入り込ませた。それゆえ、聖仙たちは余を『真実(satya)』と知っている。
- (12) 余はかつてサットヴァ(善)から¹¹⁹離れたことはない。サットヴァは¹²⁰、余によって作られたものと知るべし。この世での誕生においても¹²¹、余のかつてのサットヴァは存在したのである、財宝を得る者よ。

¹¹²P. śipiviṣṭeti cākhyāyām hīnaromā ca yo bhavet Ca. hīnaromā, hīneṣu kakṣādiṣu notkataromā śipiviṣṭo `tra / (hīnaromā とは、中心部など(の髪)が消滅したので、多くの髪はないことであり、それが、ここでは śipiviṣṭaḥ 『禿頭』である) Cn. hīnāni tyaktāni romāṇīva romāṇi, aṃśavaḥ, avayavā yena sa śipir niṣkala ity arthaḥ / tena śipinā rūpenṇa yat kiṃcid āviṣṭam yena, ato `yaṃ śipiviṣṭaḥ / (hīnāni, すなわち、捨てられた, romāṇi 髪たちのごとく、という意味である。髪たちとは、すなわち光線たちである。それによって諸部分となるもの、それが śipih, すなわち、部分のない光線が、という意味である。その光線という姿によって、何であれ浸透されたものが、śipiviṣṭaḥ 『禿頭』である) Cs. uṣṭaromā, keśaśmaśruromā yaḥ pumān taṃ śipiviṣṭaśabdo `bhidhatte / uṣṭaromnā yajamānenānuṣṭhitam karma śipiviṣṭam / (uṣṭaromā, すなわち、髪・髭・体毛をもつ男に『禿頭』の語は向けられている。体毛を剃った祭主によって、執行される祭式が、『禿頭』である) Sandhi irregular: śipiviṣṭeti Cf. Oberlies[Grammar]: 1.8. Double sandhi, 1.8.3. -e- < /-as i-/, p.35.8.

¹¹³tenāviṣṭam hi(B.,K.: tu) yat kiṃcid chipiviṣṭam hi tat smṛtam (B.,K.: chipiviṣṭeti ca smṛtam) Cv. yajñeṣu diyamānaṃ yan māṃsarūpaṃ haviḥ tat śipināmakam bhavet / tena śipinā āviṣṭam yat kiṃcid astu tat śipiviṣṭam smṛtam / (もろもろの祭式において施された肉の姿をした供物が、śipi 光線を名とすることになる。その光線によって、āviṣṭam 浸透されたものが何かあるとせよ。それが śipiviṣṭam smṛtam 『禿頭の者』と伝えられている)

¹¹⁴yāsko ṛṣir udāradhiḥ Sandhi irregular: yāsko ṛṣir Cf. Oberlies[Grammar]: 1.2. Special cases of sandhi, 1.2.1 -o r- < /-as r-/, p.23.2)

¹¹⁵ado naṣṭam nirukutam abhijagmivān Cn. adho naṣṭam, vedaharaṇavelāyāṃ pātāle `ntarhitam / (adho naṣṭam とは、ヴェエダを持ち去った時に、パーターラ界に隠された、という意味である) Cs. vicinnasampradāyam / ((adho naṣṭam とは) 伝承の途絶えた、という意味である) Cf. Hopkins[Great Epic]: niruktam, the title of a specific literary work, p.14.9.

¹¹⁶P. na jāye `ham B.,K.: na jāyeyam

¹¹⁷P.,B.: satyā devī K. satyadevī Cn.,Cv.: pṛthivyaptejāṃsi (Cv. mūrtaṃ) sat, vāyvakāśau (Cv. amūrtaṃ) tyat, tadubhātmatvād vā sattyanāmāham ity arthaḥ / (sat とは地・水・火(の形あるもの)である。tyat とは風と虚空(の形なきもの)である。その両者を本性とする故にこそ、余は sat-tyat という名前である、という意味である) Cs. pṛthivyaptejorūpaṃ bhūtratrāyaṃ pratyakṣam / vāyvakāśam aparokṣam asat / (地・水・火の三元素は、目に見える(すなわち, sat である)。風と虚空は目に見えない, すなわち, asat である)

¹¹⁸pauskare brahmasadane Cs. pauskare, hr̥dayapūṇḍarikasthe brahmasadane, hr̥dayapratyagrūpena sthite mayi sac ca tyac ca āveśitam iti māṃ satyaṃ vidur ity arthaḥ / (pauskare, すなわち、心臓の蓮華にある, brahmasadane ブラフマー神の座所に、すなわち、心臓において個我の姿として存在する余に, sat と tyat は入ったので, māṃ satyaṃ viduḥ, 余を sat-tyam 真実と、知った、という意味である)

¹¹⁹sattvāt Cs. sattvāt, sattvādiguṇāt / (sattvāt とは、サットヴァなどのグナから、という意味である)

¹²⁰sattvaṃ vai Cs. sattvaṃ, prāṇijātam / (sattvaṃ とは、誕生した生き物は、という意味である)

¹²¹P. janmanihābhavāt B.,K.: janmanihābhavet Cp. ihajanmani, kṛṣṇāvatāre, paurvikam nārāyaṇabhāvasattvajñānam, ato `ham sāvata ity arthaḥ / (ihajanmani, すなわちクリシュナの権化において, paurvikam, すなわち、ナーラーヤナに存在したサットヴァの

叙事詩の宗教哲学

- (13) 余を、果報を望まぬ行為に従事するサートヴァタと考えよ¹²²。余は、サートヴァタの認識によって知られるサートヴァタであり、『サートヴァットたちの主』である¹²³。
- (14) プリターの子よ、余は大きな黒い鉄となって、土地を耕す¹²⁴。余の色は黒いゆえに、余は『クリシュナ』である、アルジュナよ。
- (15) 余によって、地は水たちと結合し¹²⁵、虚空は風を結合し、風は火と結合した。それゆえ余は『ヴァイクンタ』である¹²⁶。
- (16) 涅槃は最高の安楽であり¹²⁷、最高のダルマであると言われる。余はかつてそれから逸脱したことがない。その行為によって余は『揺るがぬ者』(acyuta 不退)である。
- (17) 地と空の両者は、世界すべてに行き渡っていることはよく知られている¹²⁸。両者を(それぞれに)保つために、余をまさしく『アドークシャジャ』(世界軸の下に生まれた者)と¹²⁹(呼んだ)。
- (18) ヴェーダを知る人々¹³⁰、そして言葉の意味を考察する人々は、余を、祭壇の前で『アドークシャジャ』と¹³¹声高に(niruktam)讃えるのである。このことは確立している。
- (19) 思いを同じくする¹³²最高の聖仙たちによって次の言葉が発せられた。「威光あるナーラーヤナを除いて、この世界には、アドークシャジャはいない。」

知識が(存在した)。それゆえ、余はサートヴァタである、という意味である) Cs. iha asmin mātūre āvirbhāve, yaduvamśāvātāre, me pūrvakāḥ pitāmahaḥ sātvaṭanāmā / tasya gotre jātatvāt sātvaṭaḥ / (iha, すなわち、この世のマトウラーにおける出現において、すなわち、ヤドゥ族の家系の降誕において、余にはサートヴァタという名の以前の祖先がいた。その家系に誕生した故に、余はサートヴァタである)

¹²²P. nirāśīḥkarmasamyuktaḥ sātvaṭaḥ mām prakalpaya B.,K.: nirāśīḥkarmasamyuktaḥ sātvaṭaḥ cāpy akalmaṣaḥ

¹²³P. sātvaṭaḥ sātvaṭaḥ patiḥ B.,K.: sātvaṭaḥ itī sātvaṭaḥ

¹²⁴kr̥ṣāmi medinīm pārtha bhūtvā kārṣṇāyaso mahān Cf.Gonda[1069]: regarding the weapons of God Viṣṇu, "In the curious stanza, Mbh.12,342,79 (=MBh.XII.330.14) the god describes himself as tilling the earth and consisting of black metal (iron)", p.100.4.

¹²⁵mayā samśleṣitā bhūmir adbhīr Cs. samśleṣitā, parasparādhāreṇa sthāpitā / (samśleṣitā とは、(神が) 互いを支えることによって存立させられた、という意味である)

¹²⁶vaikuṇṭhatvaṃ tato mama Ca. samghaṭṭayati bhūtajātasargaṃ ca śaktitayeti vikuṇṭhatve samartha itī vaikuṇṭhaḥ / (元素より生じた創造物を、能力に応じて結合せしめる、というように、ヴァイクンタ(浸透)性における能力があるので、ヴァイクンタと言われる) Cp. vigatā kuṇṭhā, asāmarthyam yasyeti vikuṇṭhaḥ / vikuṇṭha eva vaikuṇṭhaḥ / svārthe taddhitāḥ / (kuṇṭh 愚かさ、すなわち、無能力を、vigatā 去ったものが、ヴァイクンタである。ヴァイクンタはヴァイクンタに他ならない。その語自体の意味において taddhita 接辞(をもつ二次的派生名詞) は用いられるのである)

¹²⁷P. nirvāṇam paramam saukhyam B.,K.: nirvāṇam paramam brahma

¹²⁸P. viśrute viśvalaukike B.,K.: viśrute viśvatomukhe

¹²⁹mām adhokṣajam añjasā Ca. na śakyete dhārayitum itī adho, dyāvāpṛthivyau / te akṣitum, ghaṭayitum, jāta itī adhokṣajāḥ / (この両者は、支えさせる(dh) ことができないことから、a-dhas と言われる。それは、すなわち、天と地である。この両者を、akṣitum、すなわち、結合するために、jātaḥ 生まれた、ので、adhokṣaja と言われる)

¹³⁰niruktaḥ vedaviduṣo ye ca この詩節の冒頭の語である niruktam とそれに続く語との関係がはっきりしない。Deussen, 中村[2000] は、この語を前詩節の述語的働きをもつものとして捉えている。(Deussen: p.813, v.83; 中村[2000]: p.985, v.83) Esnoul[1979] は、niruktam に続く vedaviduṣo と関係づけて「語源を知るヴェーダに通じた人々は」と解している。(p.161, v.83) Ganguli の訳は、はっきりしない。(p.165.14)

¹³¹prāgvamśe adhokṣaja itī Cv. akṣajam akṣajanitam jñānam adhaḥ yasmād itī vyutpattyā / yadvā būmīsthitabhūmyākhyalakṣmīrūpavat, vyomni sthitaśrīdevyākhyalakṣmīrūpavac ca, svaprasādād vinā sarvathā adṛṣṭatvād vā adhokṣajāḥ / ((この語は) akṣajam とは、目に生じた知識であり、adhas、すなわち、それよりも下に、という語源的説明によっている。あるいは、地にあつて地と呼ばれるラクシュミーの姿のごとく、空にあつて聖なる女神と呼ばれるラクシュミーの姿のごとく、自身の恩寵なしには、まったく眼に見えない(adṛṣṭa) ので、adhokṣaja と言われる) Sandhi irregular: prāgvamśe adhokṣaja Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.5. Absence of abhinīhita-sandhi, 1.1.5.1. -e a-, p.20.2.

¹³²P.,K.: ekamatair B. ekapadair Ca. ekapādaiḥ, ekapadasyātmanah / (ekapādaiḥ とは、一つの語の、すなわち、アートのマンの(見者たちによって)(?)、という意味である) Cn. ekapādaiḥ pṛthakpādaiḥ / (ekapādaiḥ とは、別々の言葉によって、という意味である) Cv. ekamataiḥ, ekaikatapavartakaiḥ / (ekamataiḥ とは、それぞれの考えを進める者たちによって、という意味である)

- (20) 余の光の乳酪 (ghṛta) は¹³³, 世界において人々の命を保つものである¹³⁴。揺ぎなきヴェーダの智者たちによって、余は『グリタアルチ』(乳酪の光)と称賛された。
- (21) (身体には) 三要素 (dhātu) があると説かれているが、それらは行為によって生じた¹³⁵と伝えられている。(三要素とは) 胆汁, 粘液, 体風である。これ (eṣa 身体) はその集合であると言われる¹³⁶。
- (22) 人はこれら (の三要素) によって維持され、これらが滅すると滅する¹³⁷。それゆえアーユルヴェーダを知る人々は¹³⁸, 余を『トリダートウ』(三要素)と¹³⁹呼ぶのである。
- (23) パーラタ族の者よ, もろもろの世界では, 至尊のダルマはグリシャ (牡牛) と呼ばれている。余を『ヴェーダ語彙』(Nighaṇṭu) の言葉に述べられた『最高のグリシャ』と知れ。
- (24) 猿, 最上の猪, ダルマは, グリシャ (雄々しいもの) とされる。それゆえ創生主カシュヤパは余を『グリシャーカーピ』(牡猿)¹⁴⁰と呼んだ。
- (25) 神々もアスラたちも, 余の始まり・中間・終りを決して知ることはない¹⁴¹。(CF.MBh.XII.327.89a) 力あり, 偏在し, 世界の観察者たる余は, 『アナーディ』(始まりなき者), 『アマディヤ』(中間なき者), 『アナンタ』(終りなき者)として詠われるのである。(韻律: Bhujamḡaprayāta¹⁴²)
- (26) 余は, この世では, もろもろの清浄な聞くに価することを聞くのである, 富を得る者よ。余は, 悪しきことどもを聞くことはない。それゆえ余は, 『シュチシュラヴァス』(清浄を聞く者)(と呼ばれるの)である。
- (27) 余はかつて, 天眼をもつ¹⁴³一角の猪となって¹⁴⁴, この大地を持ち上げた。それゆえ余は, 『エーカシュリンガ』(一角)(と呼ばれるの)である。
- (28) そして, 三つの隆肉をもつ¹⁴⁵猪の姿をとった。それゆえ, その体の形状に基づいて『トリカクド』(三つ瘤の者)と呼ばれるのである。

¹³³ghṛtaṃ mamārciṣo Cn. arcīṣaḥ ghṛtaṃ, vardhakam iti śeṣaḥ / (光の乳酪は成長させるものである, と補われる) Cv. yadvā, goghṛtasya suvarṇavarṇatvāt ghṛtaṃ mama ārciṣaḥ santi / (あるいは) 牛の乳酪は黄金の色をもつから, 私の乳酪は光である。)

¹³⁴jantūnām prāṇadhāraṇam Cp. jantūnām jīvanām prāṇadhāraṇārthaṃ yā mamārciḥ, tāṃ ghṛtena vardhayate ity arthaḥ / (jantūnām, すなわち, 生きている者たちの, 命を維持するための私の光は, 乳酪によって増大するのである)

¹³⁵karmajā Cs. karmajāḥ matsamkalpajātāḥ iti yāvat / (karmajāḥとは, 余の意志より生じた, ということである)

¹³⁶pittaṃ śleṣmā, vāyus ca eṣa samghāta ucyate Cf.Hopkins[Great Epic]: *ucyate*, a direct citation, according to Āyurvedin, p.12.2. Sandhi irregular: *ca eṣa* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.4. *-a/ā e-*, p.12.12.

¹³⁷etaiḥ kṣīnaiś ca kṣīyate (b 句) Cf.Hopkins[Great Epic]: *ca kṣīyate*, the syllable remains light before *cch* and *kṣ* and *dv*, this licence may be assumed for the later epic style, p.243.23.

¹³⁸āyurvedavidas Cf.Hopkins[Great Epic]: Āyurvedin, p.12.2, fn.1.

¹³⁹tridhātuṃ mām Cn. trayo dhātava upādhibhūtāḥ santi asya iti tridhātuḥ / (tridhātuḥとは, (相互に) 限定する者となって存在している三種の要素をもつ者である)

¹⁴⁰vṛṣākapiṃ Cv. ā samantāt, kaṃ jalam, pāyayati / akaṃ duḥkham pīnaṣṭīti vā vṛṣākapiḥ / (vṛṣākapiḥは, ā, すなわち, すべてに, kaṃ すなわち, 水を, 飲ませる (pāyayati) から, あるいは, akaṃ, すなわち, 苦を, 滅する (pīnaṣṭīti) から, vṛṣākapi であると言われる) Gonda[1969]: identification of Vṛṣākapi and Viṣṇu, “*kapi-* denotes the foremost of the boars and Dharma is otherwise known by the name of *vṛṣa-*, p.153.25.

¹⁴¹P.,B.: kadācid vidante surāś cāsūrāś ca K. kadācid vimante dvijā me surāś ca

¹⁴²Cf.Hopkins[Great Epic]: Bhujamḡaprayāta, a jagatī, appearing in the middle of the chapter, p.324.1.

¹⁴³P. divyadarśanaḥ B.,K.: nandivardhanaḥ

¹⁴⁴ekaśṛṅgaḥ purā bhūtvā Cs. ekaśṛṅgaḥ, ekadamṣṭraḥ / (ekaśṛṅgaḥとは, 一本の牙をもつ, という意味である)

¹⁴⁵trikakudo vārāham rūpam Cn. trikakudadh, trīṇi kakudāni, uccapradeśāḥ skandhapotradaṃṣṭrā yasya / (trikakudadhとは, 三つの瘤, すなわち盛り上がった部分, すなわち, 肩・鼻・牙を, もつものである) Cs. trikakudah, śarīrasya triṣu pradeśeṣu, mukhaskandhakāyeṣu, śreṣṭhatarah / (trikakudahとは, 身体の三つの部分において, すなわち口・肩・体において, より美しい, という意味である) Cv. bhujadvaye śīromūle ca trayaḥ kakudah, carmāvṛtapṛṣṭhasthūlāvayavāḥ yasya sa tathoktaḥ / (二本の牙, そして頭部のつけ根に, 三つの隆肉, すなわち, 皮で覆われた背の大きな部分 (?)をもつ者が, そのように言われている)

叙事詩の宗教哲学

- (29) カピラの知識を考察する者たちによって¹⁴⁶『ヴィリンチャ』と呼ばれる¹⁴⁷創生主こそが、余である。余は心によって (cetanāt) すべての世界を創造したのである。
- (30) 確固とした確信をもつサーンキヤの師匠たちは、学問を友とし、太陽にいる永遠なる余を、『カピラ』と言った¹⁴⁸。
- (31) この威厳があり、ヴェーダにおいて¹⁴⁹讃えられ、ヨーガ行者たちによって (yogaiḥ) 常に礼拝される『ヒラニヤガルバ』(黄金の胎児)こそが余であり、威光ある者と伝えられている¹⁵⁰。
- (32) ヴェーダを知る人々は、余を二十一の支派をもつ¹⁵¹『リグ・ヴェーダ』であると言い、千の支派をもつ『サーマ・ヴェーダ』であると讃える。余に信愛をもつ得難きパラモンたちも、アールニヤカにおいて、(余を)詠った¹⁵²。
- (33) 五十六と八と三十七の支派が存在する『ヤジュル・ヴェーダ』は余であると、アドヴァルコ祭官において伝えられている。
- (34) アタルヴァ・ヴェーダを知るパラモンたちは、余を、五つの儀軌をもち¹⁵³もろもろの呪術によって強められた『アタルヴァ・ヴェーダ』であると考えた。
- (35) 種々の(ヴェーダの)支派、もろもろの支派における讃歌、音調・音節・発声はすべて余の創造であると知れ。
- (36) 恩恵を与えるものとして、北方で(乳海より)起ち上がった『馬頭』、それは、プリターの子よ、(語の)順序と綴りによる(ヴェーダの)区分を知る (kramākṣaravibhāgavit) 余である。
- (37) ラーマによって教示された道に従い¹⁵⁴、余の恩寵によって、偉大なパンチャーラの子孫(ガーラヴァ仙)は、その永遠の存在(である馬頭)からヴェーダ吟誦法 (krama) を得た。パーピラヴィヤ家系の彼が、最初の吟誦法の通曉者として¹⁵⁵輝いたのである。

¹⁴⁶P. kapilajñānacintakaiḥ B. kāpilajñānacintakaiḥ K. kāpilam jñānacintaiḥ

¹⁴⁷P. viriñca iti yaḥ proktaḥ B.,K.: viriñca iti yat proktaḥ Cn. viśeṣeṇa riñakti, tattvānām parisamkhyānākhyam pravilayam karotīti viriñcaḥ / (viśeṣeṇa 特に, riñcati 空にする, すなわち, 諸原理として列挙されたものの全体を消滅させるので, viriñca と言われる)

¹⁴⁸kapilam prāhur Cv. kam mokṣasukham pibanty aneti kapitvam jñānam, tevala (? tena laḥ) samānaḥ kapilaḥ / (kam, すなわち, 解脱の安楽を, これによって人々が飲むのが, kapitvam, すなわち, 知識である。それと, la, すなわち, 等しいものが, kapila である)

¹⁴⁹P. eṣa yaś chandasi B.,K.: eṣa chandasi Cn. chandasi samaṣṭilingābhimāni sūtrātmā, bhuvī catrumukhaḥ / (chandasi(の chandas) とは, 集成という特徴を誇りとし, 経を本質とし, 地上において四つの顔をもつ者である)

¹⁵⁰P.,K.: sa evāhaṃ vibhuḥ smṛtaḥ B. sa evāhaṃ bhuvī smṛtaḥ

¹⁵¹P. ekaviṃśatisākhā B.,K.: ekaviṃśatisāhasraṃ Cf. Hopkins[Great Epic]: in numerical analysis, the Rig Veda is said to “have twenty-one thousand” (probably “twenty-one branches”), Sāma Veda “one thousand branches”, Yajur Veda “fifty-six and eighth and thirty-seven (one hundred and one) branches”, p.5.3ff.

¹⁵²gāyanty āraṇyake viprā Cf. Hopkins[Great Epic]: *Āraṇyakas*, rare mention in the epic, here the singular, p.9.5.

¹⁵³pañcakalpaṃ Cp. pañcakalpaṃ, nakṣatralpaṃ, vaiśāṅkalpaṃ, saṃhitākalpaṃ, āṅgirasakalpaṃ, śāntikalpaṃ / (pañcakalpaṃ とは, 天体の儀軌, 三聖火祭の儀軌, 集成の儀軌, アンギラスの儀軌, 寂靜の儀軌である)

¹⁵⁴P.,K.: rāmādeśitamārgeṇa B. vāmādeśitamārgeṇa Cs. rāmādeśitamārgeṇa, jāmadagnyopadiṣṭahayagrīvārādhanaṇprakāreṇa / (rāmādeśitamārgeṇa とは, ジャーマド・アグニによって示された馬頭を礼拝する手段によって, という意味である)

¹⁵⁵P. prathamam kramapāragam B.,K.: prathamam kramapāragam Cf. Hopkins[1899]: *krama*, Gālava, Bābhavyagotra, Pāñcāla, the grammarian, through the especial grace of the deity (who is *kramākṣaravibhāgavit* (v.36d)), and being instructed in the method of vāma(deva), became a shining light as a krama specialist, p.27.3; [Great Epic]:, p.5, fn.1.

- (38) ナーラーヤナから恩恵を得て、比類なきヨーガに達して、ヴェーダ吟誦法 (krama) を修め、音韻学 (śikṣā) を確立した後に、かのガーラヴァ仙は (輝いたのである)。
- (39) カンドリーカ家系の¹⁵⁶光輝あるブラフマダッタ王は、誕生と死より生じる苦しみを何度も何度も想起した後、多くの誕生における卓越性のために¹⁵⁷、もろもろのヨーガの完成に到達した。
- (40) プリタ - の子よ、かつて余は、ある理由で、ダルマの息子として世に現われた。それゆえ、クル族の虎よ、余は『ダルマジヤ』(ダルマより生まれた者)と伝えられている。
- (41) かつてナラとナーラーヤナは不滅の苦行を行った。両者は、ガンダマーマダナ山において、ダルマという乗物 (dharmayāna) に乗った。(Cf. 松原 [1995]: ナラ・ナーラーヤナとルドラの戦闘, MBh.XII.330.41-71, p.130.19)
- (42) ちょうどこの時期にダクシャの祭式があった。ダクシャはルドラの取り分を用意しなかったのである、バーラタ族の者よ。
- (43) このため (ルドラは)、ダディーチ仙の忠告に従い、ダクシャの祭式を破壊した。彼は、怒って、燃えている槍を何度も投げ込んだのである。
- (44) その槍は、ダクシャの祭式を完全に灰にした後、突然、我々両者の近くのバダリーの隠棲処に¹⁵⁸飛んで行き、大変な勢いでナーラーヤナの胸に刺さったのである、プリターの子よ。
- (45) そして自身の熱に入り込まれた¹⁵⁹ナーラーヤナの髪は、ムンジャ草の色になった。そのため余は『ムンジャケーシャヴァット』(ムンジャ草の髪をもつ者)(と言われるの)である。
- (46) ナーラーヤナに命中したその槍は、偉大な神によって、「フム」と言う音声によって押し戻されて、シャンカラ (ルドラ) の手に戻った。
- (47) するとルドラは熱力をそなえた彼の二人の聖仙に向かって走った。すると宇宙の本性であるナーラーヤナは、走ってきた¹⁶⁰彼の頸を片手で掴んだ。このために、ルドラは青い頸をもつのである¹⁶¹。
- (48) そこでナラはルドラを殺すために一本の葦をつかんだ¹⁶²。そして、もろもろの呪文を唱え、それはすぐに大きな斧となった。
- (49) 斧は、すぐにルドラに¹⁶³投げつけられたが、粉々になった。それゆえ余は、斧の破碎のために、『カンドパラシュ』(破碎された斧をもつ者)と伝えられている¹⁶⁴

¹⁵⁶P.,B.: kaṇḍarīko K. puṇḍarīko N. kaṇḍarīka iti kulanāma / (kaṇḍarīkaḥとは、家系の名である)

¹⁵⁷saptajātiṣu mukhyatvāt Cf.Hopkins[1902]: *sapta*, standing for *saptasu*, used in the indefinite sense of "many", p.113.5, 12; Oberlies[Grammar]: endingless cardinals, p.126.fn.2.

¹⁵⁸badaryāśramam antikāt Cf.Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, regarded as an incarnation of Viṣṇu in the hermitage of Badarī, pp.129.4, 146, Reference No.36.

¹⁵⁹P. tataḥ svatejasāviṣṭāḥ B. tatas tattejasāviṣṭāḥ K. tat tasya tejasāviṣṭāḥ

¹⁶⁰samuddhūtam Cn. samuddhūtam, uḍḍiyāgatam / (samuddhūtamとは、飛んでやって来た、という意味である)

¹⁶¹tenāsya śitikaṇṭhā Cf.Gonda [1970]: *śitikaṇṭha*, p.14.3, note 113.

¹⁶²P. jagrhe naraḥ B.,K.: nara uddharan

¹⁶³P. rudre B.,K.: tena

¹⁶⁴K.はこの詩節の後に、次の4行を挿入している。(=MBh.XII.881*)

アルジュナは言った。

- (50) ヴリシュニ族の者(クリシュナ)よ、この三界を攪拌する¹⁶⁵戦いにおいて、誰が勝利したのですか。このことを私に語って下さい、人々を苦しめる者よ。

聖なる至尊者は言った。

- (51) このルドラとナーラーヤナ自身が接近して戦う戦いにおいて、たちまちに全世界はすべて¹⁶⁶大混乱になった。
- (52) 火は、もろもろの祭式において美しく正しく供えられた供物を取らなかった。もろもろのヴェーダは、清められた心の聖仙たちに対しても¹⁶⁷輝かなかった。
- (53) その時には、神々にはラジャスとタマスとが行き渡った。大地は震動し、そして空は裂けた。
- (54) もろもろの光は輝きを失い、ブラフマー神は座から落ちた¹⁶⁸。海は干上がり、ヒマラヤ山は砕けた。
- (55) このような(悪しき)前兆(nimitta)が生じたので、パーンドウ王の息子よ、ブラフマー神はすぐに、神々の群と偉大な聖仙たちに囲まれて、戦いが起こっている場所にやって来た。
- (56) 四つの顔をもち、言葉では言い表せない¹⁶⁹ブラフマー神は、合掌して、ルドラに言った。「もろもろの世界に吉祥あるべし。一切の支配者よ、世界の安寧のためにもろもろの武器を置け。
- (57) 不滅のもの、未顕現のもの、支配者、世界の創造者、不動のもの、行為者、対立なき者、非行為者(akartr̥)¹⁷⁰として知られるもの、
- (58) 顕現の状態に至ったそのものの、これが吉祥にして唯一の姿である¹⁷¹。ナラとナーラーヤナとしてダルマの家系を継ぐ子孫として誕生したのである。
- (59) 大苦行を行い、最上の神として、偉大な誓約をもって(誕生したのである)。余は、ある理由によって¹⁷²、彼の恩寵によって生まれた。そして汝は、原初の世界創造において、永遠の存在として、(彼のシヴァの)怒りから生じたのである。

rudrasya bhāgam̐ pradadur bhāgam̐ uccheṣaṇam̐ punaḥ /

(神々はルドラに取り分を与えた。残余こそが取り分である。)

śrutir̥ apy atra bhavati vedair̥ uktas tathā punaḥ /

(この点について天啓聖典も存在する。もろもろのヴェーダによってやはり同様に言われている。)

uccheṣaṇabhāgo vai rudras tasyoccheṣaṇena hotavyam

iti sarve gamyarūpeṇa tadā //

(ルドラは残余を取り分とする。ルドラには残余が捧げられるべきである。このようにして(iti)、その時、すべての神々は、願わしい形(の取り分)が(捧げられる))。

¹⁶⁵P. trailokyamathane B.,K.: tailokyaśmane

¹⁶⁶P. kṛtsnā lokāḥ sarve 'bhavaṃs tadā B.,K.: kṛtsnāḥ sarve lokāḥ tadābhavat

¹⁶⁷sma ṛṣṇām̐ bhāvitātmanām̐ Sandhi irregular: sma ṛṣṇām̐ Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.3 -a/ā r-, p.9.12)

¹⁶⁸P. caivāsanāc cyutaḥ B.,K.: caivāsanacyutaḥ

¹⁶⁹caturvaktro niruktagaḥ Cf.MBh.XII.326.47 Hopkins は、'niruktagaḥと読むことを提示している。(Hopkins[Great Epic], p.14, fn.2)

¹⁷⁰akartā Cf.Matsubara[1994]: the supreme God is *akartr̥*, pp.69.1, 105 Reference No.3.

¹⁷¹asya ekā mūrtir̥ Sandhi irregular: asya ekā Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, 1.1.2.4. -a/ā e-, p.12.12.

¹⁷²P. kasmim̐ścit kāraṇāntare B.,K.: kutaścit

- (60) 余は神々と偉大な聖仙と共に(汝に)恩恵を与えるであろう。すぐに静まるべし。すぐにでももろもろの世界の平安があるべし。」
- (61) ルドラは、ブラフマー神によってこのように言われて、怒りの火を消した。そしてルドラは威光ある神ナーラーヤナに満足し、最初にして最上の神、恩恵を与えるハリ(ナーラーヤナ)に保護を求めたのである。
- (62) それから、恩恵を与える神は、怒りを抑え、感官を制御し、満足して、ルドラと和を結んだ。
- (63) 聖仙たちによって、ブラフマー神によって、そして神々によって正しく礼拝された世界の支配者ハリは、(神々を)支配する神(ルドラ)に言った。
- (64) 「汝を知る者は余を知る。汝に従う者は余に従う¹⁷³。我々二人には何の相違もない。汝はこれとは異なる考えをもってはならない。(Cf.MBh.XII.328.23)
- (65) 今日以後は、(汝の)槍でつけられたこの印は、『シュリーヴァツァ』(吉祥の卍字)とならねばならぬ¹⁷⁴。汝は、余の手で印づけられた『シュリーカクタ』(吉祥な頸をもつ者)となるであろう。」
- (66) このように互いに印をつけ¹⁷⁵、比類なき友誼を結んでルドラと結びついた二人の聖仙は、神々を帰らせて、心乱さず苦行を行った。
- (67) このように、この戦いにおけるナーラーヤナの勝利が汝に語られた、プリターの子よ。聖仙たちによって語られたもろもろの秘密の名前と由来とが、ここで、汝に語られたのである、パーラタ族の者よ。
- (68) このように余は、多くの姿をとってこの大地を行くのである。そしてブラフマンの世界を、永遠の「牛の世界(goloka)」を行くのである、クンティーの子よ。汝は、戦いにおいては余に守護され、偉大な勝利を得た。
- (69) 戦いが起こった時(yuddhe sampratyupasthite)、汝の前を行く者、それを捲き髪之神、神々の神たるルドラと知れ、クンティーの子よ。
- (70) 彼は(余の)怒りから生じた「時」(kāla)であると、余は汝に語った。かつて汝が殺した敵どもは、まさしく彼によって殺されたのである。
- (71) この威光量り知れない神々の神、ウマーの夫、一切の支配者である、不変のハラを恭しく礼拝せよ¹⁷⁶。

¹⁷³ yas tvam vetti sa māṃ vetti yas tvām anu sa mām anu / Cf.MBh.III.13.38 (identification of Kṛṣṇa and Arjuna); Hopkins[Great Epic]: identification of Viṣṇu and Rudra, p.184.fn.2.

¹⁷⁴ adyaprabhṛti śrīvatsaḥ Cf.MBh.XII.329.42; Hopkins[Great Epic]: _____, _____, Illustrations of Epic Āloka Forms, (perhaps pathyā), p.453, No.26.

¹⁷⁵ B.,K. はこの詩節の前に、śrībhagavān uvāca を挿入している。

¹⁷⁶ B.,K. はこの後に次の2行を挿入している。(=MBh.XII.882*)

yaś ca (882* yaḥ sa) te kathitaḥ pūrvaṃ krodhajeti punaḥ punaḥ /
(かつて汝に「(余の)怒りから生まれた」と繰り返し語った者、)
tasya prabhāva evāgre yac chruṭam te dhanamjaya /
(その者の威力を汝は以前聞いたのである、財を勝ち取る者よ。)